



News Letter

No. 9 <2002年2月1日発行>

事務局：〒061-0212 北海道石狩郡当別町字金沢 166-8 ☎01332-5-5533 Fax01332-2-3013

http://www.yezodeer.com/ E-mail: ida@gallagherage.co.jp

- ◆大地の恵みをいただきますー1
- ◆シカの慢性消耗病（CWD）とはー2
- ◆会員ひろば：エゾシカを利用するヒグマー4
- ◆部会だよりー5
- ◆シカと聞こう！シェフの話第2話ー6
- ◆エゾシカ・ニュース・クリップー7

乾いた発砲音に一瞬遅れて、前方約150mで1頭のシカが崩れ落ちたー。

01-02 狩猟シーズンの初日、西興部村でエゾシカ協会理事の鈴木正嗣さんの流し猟に同行した。流し猟とは、可猟区内の農道や林道をクルマで走行しながら（「流しながら」）シカを探し、見つけたら徒歩で静かに標的に近づいて撃つ方法である。

向かったのは、地元のエゾシカ協会会員、中原慎一さんに前夜勧めてもらった好ポイントだ。薄明かりの中、広大な牧草地に目を凝らす。幸先よく日の出の十分ほど前に最初のターゲットを発見し、草原を低い姿

べることに費やすのだと知らされても、たった3年足らずの間に100kgもの体重に達するとはー。

臓物を抜いた腹腔の奥、脊椎骨の両脇には、無数のゴムバンドを束ねたような見事に発達した背中の筋肉（いわゆるフィレ）が露わになっている。植物しか食べない草食獣が、いったいどうやってこんな素晴らしい肉体を作り上げることができるのか、感嘆せずにはいられない。

そのからだをいま手中にした狩猟者には、獲物はまさに「大地からの恵み」だ。鈴木さんはシカを大事にクルマの荷台に載せると、中原さんが会長を務める「西

◆Topic1 大地の恵みをいただきますー 西興部村・流し猟 同行記◆

平田 剛士（フリーランス記者／エゾシカ協会事務局）

勢でストーキング。照準を定める段になっても、相手はまだ気づかない。そのまま日が昇り、鈴木さんは解禁時間とほぼ同時に「初物」を倒した。駆け寄ってみると、体重100kgはありそうな2歳の雄だった。パーンズ弾は首の脊椎を砕いていたが、血管は傷つけずに済んだようで、出血はほとんどない。

角にロープを結わえ、畑の中から農道まで二人がかりで引きずり出し、さっそく解体にかかる。

まだ温かい死体を仰向けにしてから、小さなナイフで下腹部に切り口をつけ、差し込んだ刃先で胸に向けて皮を切り開いていく。胃・肝臓・肺臓・心臓……次々に現れる内臓はどれもきれいで、美しささえ感じるほどだ。予想に反して、ほとんど無臭である。

むっとするニオイが立ちこめたのは、全ての内臓を地面に取り出し終えてから、胃袋を割いた瞬間だ。サッカーボールほどに膨らんだ中に、消化中の植物繊維が詰まっていた。まだ青々として、死の直前まで食べ続けていた牧草がその主体だと分かる。

それにしても、と改めて思う。たとえ農家が作付けた牧草が主体だとしても、また活動時間の4割を食

興部村養鹿研究会」の処理場に向かった。造りつけの大型冷蔵庫に獲物を吊し、ほっと一息つく。「猟場のそばにこんな施設があって、使わせてもらえるのは、本当にありがたい」と鈴木さん。

エゾシカ協会の事務局に出入りし始めて1年足らず、じつは実際のシカ猟をつぶさに見学したのはこれが初めてだった。そんな筆者も、ハンティングの醍醐味の一端を味わえた気がした。■



↑ 鈴木さんが仕留めた雄ジカ

(2001年11月1日、西興部村で)

◆Topic2 シカの慢性消耗病 (CWD) とは —いま、知っておきたいこと—

籠田 勝基 (獣医学博士/エゾシカ協会事務局)

現在大問題となっている BSE (牛海綿状脳症、狂牛病) に類似した慢性消耗病 (CWD) と呼ばれるシカの感染症が米国とカナダで発生し、米国農務省は昨年9月緊急事態宣言を発して、実態調査と感染シカの隔離を実施するとの新聞報道があり (10月3日付朝日新聞、読売新聞朝刊など)、エゾシカ関係者に衝撃を与えた。特に、新聞の見出しが「鹿も狂牛病」だったこともあって、ハンターやシカ肉の処理流通に携わる方は不安を感じたと思われる。その後 CWD についての詳しい報道は行われていない。そこで、この病気を正しく理解し、日本での発生を防ぐために CWD とはどのような病気かを解説する。

● 1. 発生状況

本病に感染したシカは慢性の消瘦と衰弱を主な症状として死亡することから、慢性消耗病 (Chronic Wasting Disease, CWD) と名づけられた。本病の発生は、1967年米国コロラド州の研究施設で飼育されていたミュールジカが最初である。その後1980年代には同じコロラド州の養鹿場および野生のエルクでの発生も認められ、さらに野生のミュールジカおよびオジロジカへと発生が拡大した。1977年にはカナダのサスカチュワン州の狩猟牧場で米国から輸入したエルクでの発生が確認されカナダも発生地域となった。CWD の現在の発生地域は、米国コロラド、モンタナ、ネブラスカ、オクラホマ、サウスダコタおよびカナダ、サスカチュワンのエルクの養鹿場である。野生鹿での発生はコロラド州東北部とワイオミング州南東部に限局している。最近カナダにおいても野生ジカでの発生が報告されている。

CWD の陽性率は、コロラドおよびワイオミングにおける10年間に狩猟されたシカについては、エルク: 1.1%、エルク以外のシカ類: 2.5%であり、また別の調査では、ミュールジカ: 4.9%、オジロジカ: 2.1%、エルク: 0.5%となっており、ミュールジカでの陽性率が高く、エルクでは低い傾向を示している。また発生地域以外の調査ではすべて陰性であった。

● 2. 病原および感染様式

CWD の病原体は BSE と同様に細菌やウイルスと異なりプリオンと呼ばれるタンパク質である。この病原タンパク質は感染性を有しており、感染すると神経細胞に多数の空胞が形成され、「海綿状脳症」と言われる神経病を発症する。このような伝染性海綿状脳症としては、CWD の他に BSE、羊のスクレーピーおよび人のクロイツフェルト・ヤコブ病 (CJD) がよく知られている。また、BSE が人に感染して新型の CJD を発症させた可能性が高く、世界的な問題となっている。米国における CWD が何から感染したかは不明である

が、家畜の海綿状脳症 (BSE, スクレーピー) のプリオンタンパクを含む餌の摂取によるものと考えられているが、確証は得られていない。また羊のスクレーピーのように、かなり以前から野生ジカの風土病として存在していた可能性も否定できない。

CWD のプリオンタンパクがシカ類の間で経口的に感染することは実験的に確かめられているが、野外の自然の状態ではプリオンがどのような形で経口摂取されるかは明らかにされていない。野生のシカの間での感染は、水平感染とともに母から子への垂直感染も否定できない。

● 3. 人への感染の可能性

BSE が人に感染して新型の CJD (v-CJD) を発症させる可能性が極めて高いとされて、BSE は公衆衛生上の大問題となっている。当初 BSE はスクレーピーの病原プリオンが種の壁を越えて牛に感染したものと考えられていたが、最近では BSE とスクレーピーのプリオンは異なるものとされ、BSE のスクレーピー起源説を疑問視する説もでてきている。しかし BSE と v-CJD のプリオンは同一のものと考えられている。

ただ、CWD と BSE およびスクレーピーの病原プリオンはそれぞれ異なるものと考えられるので CWD が BSE のように、人の v-CJD の原因となるかどうかについては、今後の研究に待たねばならない。プリオンの感染機構に関する研究は始まったばかりであり、CWD の人への感染性を現段階では否定することは出来ない。

● 4. 臨床症状および診断

発症年齢は3~5歳で、17ヶ月齢から15歳のものもある。多発症状は、一般状態の悪化と進行性の消瘦である。特徴的な行動の変化として、昏迷、歩行異常、まれに興奮状態、多飲多渴、頻尿、多尿、流涎、嚥下困難などがみられる。少数例で運動失調、非協調性運動による転倒および頭部の震戦が認められている。スクレーピーの特徴である搔痒は全く認められない。死

亡は二次的な誤飲性肺炎や、膿瘍、腸炎、寄生虫などによるものが多い。

海綿状脳症の診断は、いずれも死後に、病変を有する脳神経組織を用いて行われるもので、生きている段階での診断法は未だ開発されていない。

病原・免疫生化学的診断法として、病変部に存在するプリオンタンパクを検出する ELISA 法およびウエスタンブロット法が現在 BSE の診断法として広く用いられている。CWD についても同じ方法が有用と思われるが、牛での方法をそのまま応用することは出来ない。従ってシカについては脳神経組織の病理組織学検査によって海綿状病変を検出することである。

●5. 日本における発生の可能性と予防対策

CWD は現在のところ我が国では発生していない疾病であり、外国（米国、カナダ）からのシカ類およびシカ肉などが何らかの形で輸入（迂回輸入も含む）されない限り、発生の可能性は少ないものと思われる。しかし、我が国の BSE の発生が北海道産の牛であり、その感染経路が特定されていないこと、および牛の放牧地へのシカの出現が多いことなどから、CWD そのものよりも BSE がシカに感染する可能性にも注意を払う必要がある。今後 CWD、BSE とともにシカでの発

生についても十分な監視が必要と思われる。

CWD を含む海綿状脳症には、治療法は一切存在しない。従って徹底した予防を行う以外に対策はない。CWD 対策として考えられる事項を以下に列記する。

- 1) 餌つけ用の飼料に肉骨粉の混入の可能性のあるものは絶対に使用しない。
- 2) 一度人工飼育したシカは野生に戻さない。
- 3) 衰弱や異常な症状のシカを発見したときは家畜保健衛生所や役場などへ連絡する。
- 4) 猟により捕獲したシカの解体処理には背割りは行わない。
- 5) エゾシカにおける CWD および BSE の感染の有無を知るために、捕獲エゾシカの脳組織を収集して病理組織学的検査を実施する。

CWD は日本においては発生の可能性は比較的低い病気であり、人への感染性も明らかにされていない。病気に対する正確な知識のないまま、風評によって過大な反応をすることなく、冷静に対処すべきである。エゾシカ資源の有効利用のためには、一般的な食中毒などを考慮するだけでなく、CWD にも十分対応できるようなシカ肉の衛生管理基準を確立することが急務と思われる。■

◆Topic3 2001年度・日本道路公団委託調査

高速道路（夕張～占冠間）とシカ・ヒグマの生息・分布に関する調査報告、まとめへ

昨年に引き続き日本道路公団北海道支社（以下 JH）から委託を受けました。現在取りまとめ中ですが概略報告します。

内容は、現在計画されている北海道横断自動車道（夕張～占冠間）におけるエゾシカとヒグマの生息・分布状況を把握し、動物侵入対策、動物移動路確保対策等の基礎資料を作ることです。

昨年11月13・14日に大泰司会長、佐藤健二さん（顧問）と井田が現地調査を行いました。動物の横断については、予定路線はトンネル・橋等が多く支障が少ないと判断されました。しかし、昨年、ヒグマの本線への侵入と交通事故が発生しており、ヒグマの侵入防止については対策の必要性を強く感じました。佐藤さんから具体的な助言もあり、報告書でも取り上げたいと思っています。

なお、今回の委託調査に関連して、有識者による

ワークショップ「北海道における自然と人間の共生を考える」を、パネリストに金子正美（酪農学園大）、梶光一、間野勉、宇野裕之（以上、道環境科学研究所センター）の各氏を迎えて開催しました（12月17日・非公開）。その抄録は今回の報告書に掲載予定ですが、会員間でも成果が共有できるよう工夫したいと思っています。〈事務局長：井田宏之〉



↑2001年11月に現地調査を実施

会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば 会員ひろば

◎寄稿 エゾシカを利用するヒグマ —春の野山では事故予防を—

宇野 裕之(北海道環境科学研究センター道東地区野生生物室)

一昨年(2000年)の4月、雪解けが進む阿寒湖畔でヒグマによって倒されたエゾシカを見る機会を得ました(下写真)。その日の朝、シカを食べているクマを目撃した方が連絡をくれたので、現場に飛んでいきました。シカはオスの成獣、前の日まで元気に活動していたそうです。足跡から推測すると、川下からのぼってきたクマが、数本かたまったエゾマツの陰で待ち伏せしていたのではないかと考えられました。春先、山の中で餓死したシカの死体を食べた痕跡には、これまでも出会っていたのですが、元気な成獣をハンティングした現場は初めてでした。ちょっと衝撃的でした。

ヒグマの研究者が道東地域で捕獲されたクマの胃の内容物を調査したところ、シカの出現する割合が1980年代から1990年代に入って大きく増加したそうです¹⁾。この時期、道東地域ではシカの生息数は爆発的に増加しました。狩猟などの残し、半矢個体、餓死個体など様々な利用の機会に恵まれ、クマはシカを食べることを学習していったのだと考えられます。シカが明治期に激減する以前は、それが本来の食性だったかもしれませんが。

話は少し変わりますが、昨年(2001年)の3月上旬、白糠丘陵周辺をヘリコプターで飛んだ際、雪の上でヒグマを3例目撃しました(いずれも単独個体)。雪解けが例年と

比べて特に早かったわけではないので、どうしてこんなに早く冬眠から覚めたのだろうと不思議に思いました。全くの推測ですが、シカという餌資源があるために、親子以外のヒグマの冬眠明けが早まっているのかもしれない。

エゾシカ狩猟中にヒグマに襲われる事故が近年道東で起こっています。これから春にかけて山菜採りなど山に入る機会が多くなると思います。シカの残しなどにはクマが付いている可能性がある所以要注意です。死体には不用意に近づかないこと、人間の存在を早目に知らせることなど、十分気をつけて春山の自然を楽しみたいものです。■

- 1) 北海道環境科学研究センター(2000)ヒグマ・エゾシカ生息実態調査報告書IV. 野生動物分布等実態調査(ヒグマ:1991~1998年度)



↑ヒグマが捕獲したエゾシカ雄成獣(4月中旬、阿寒湖畔)

➡VOICE 銃弾規制で「鉛害」は防げるか

前年のライフル弾規制に続き、01-02年シーズンからはショットガン弾についても、有害な鉛弾頭の使用が禁止されました。エゾシカ狩では法律上、鉛弾頭が全面的に禁止されたわけですが、これで野生動物たちの鉛中毒被害を根絶できるでしょうか。

NGO「ワシ類鉛中毒ネットワーク」(黒沢信道代表)のまとめによれば、ライフル弾規制後の00-01年シーズン、ワシ類の鉛中毒死発見数は逆に前年を上回りました。この状況から「法的決定のみで鉛中毒がほとんどなくなるとは、とうてい期待できない」というのが同ネットワークの見解です。

各支庁担当官による現地報告では、各狩猟者が合法弾を携

行していることは確かだ、といます。にもかかわらず被害ワシは増加したわけで、「実際の射撃では、違法な鉛弾がそうとう使われていたと考えざるを得ません」(宮津直倫・北海道エゾシカ対策係長)。これまで違反者の摘発例はないものの、パトロールに対しては無害弾を見せ、「本番」では隠し持った違法弾で射撃しているのだとすると、これは明らかに確信犯で、悪質だと言えます。

狩猟専門誌には、半矢で取り逃がすケースが増えたなどと、合法弾(銅弾)の欠点を強調する記事も見られます。でも、いったい何のために無害弾を使用しなければならないのか、原点に立ち返る必要はないでしょうか。

自然生態系を鉛の脅威にさらすことを望むディア・ハンターなど、いないはず。鉛弾使用規制のルールは、まさにそのために設けられたのです。

でも、鉛汚染の抑制という効果が現れなければ、規制は強化されるでしょう。すでに環境省は次の対策として、狩猟で倒した獲物の解体残滓の遺棄を禁止する方針を固めました。

狩猟者のふるまいに向けられる社会のまなざしは、いっそう強まります。保護管理を最前線で担うエゾシカハンターが、真に環境保全の立て役者になれるかどうか。ルールを守って鉛害を減らせるかどうか、試金石になります。(平田剛士/事務局)



部会だより ABC, WHAT'S NEW?

協会では、A (保護管理)、B (被害対策)、C (有効活用) の3専門部会が活動中。本欄は部会から寄せられたホットニュースなど随時掲載のコーナーです。今号はA部会のトピックを。次号も各部会の情報をお待ちしています!

◆A (保護管理) 部会より

エゾシカの遺伝子が危ない?

— 改正「動物愛護管理条例」の功罪

2001年10月から「北海道動物の愛護及び管理に関する条例」が施行されています。従来の「動物の保護及び管理に関する条例」を大きく改正した内容ですが、北海道在来のエゾシカにとって、種の存続を脅かしかねない、と生態学者たちは危惧しています。

というのも、従前の条例では「危険動物」に指定されて、飼育するには特別な許可や管理を義務づけられていたシカ類が条例改正後にこの範疇からはずれ、法律上は誰でも自由に飼育できるようになったからです。

生態学者たちが心配するのは、飼育されているシカが柵を越えて逃げ出したり、生きてまま道内で放逐されるようなケース。飼育が完全自由化されたため、逃亡や放逐の事実さえ明みに出ない可能性が高いのですが、もしそのシカが、エゾシカと亜種同士の関係に

あるホンシユウジカや、近縁のアカシカだったりすると、野生のエゾシカと交雑して、太古から北海道のエゾシカが培ってきた遺伝的多様性が、いっぺんに失われてしまう危険性があるのです。じっさい欧米では、移入されたニホンジカが在来のシカ類と交雑を起こして、大きな問題になっています。一度起きてしまうと、たとえ早期に発見したとしても、修復するのに莫大な時間と費用がかかってしまうのが移入種問題です。アライグマ、プレーリードッグ、フェレットを新たに「特定移入動物」に指定し、飼育を届け出制にするなど、全国に先駆けて強力な移入種対策を打ち出した同条例にしては、シカ類の飼育規制をなくしてしまったのが腑に落ちません。

エゾシカ協会では今後、独自の「シカ類飼育ガイドライン」を定めるなどして、飼育管理の徹底を図り、北海道在来のエゾシカを遺伝子汚染から保全する対策をとっていきたいと考えています。(平田剛士)

♪JANUARYのま情報♪

昨年暮れ十二月某日。某協会の定例事務局会議終了後、忘年会も兼ねて、札幌市中央区のフレンチ・レストラン「ポアソニエール・カザマ」(前号で紹介)で『鹿肉を味わう夕べ』を開催。ゲストの三野耕治さん(北海道開発局長)を含めて計8人が参加しました。フルコースに組み込まれた鹿肉料理3品は以下の通りです。

●もも肉のカルパッチョ (写真上)

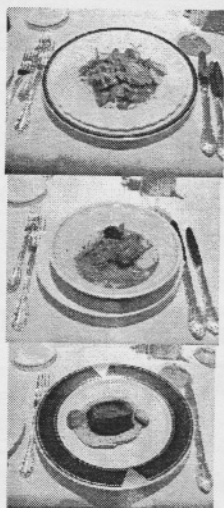
マヨネーズベースのオーロラソース、バルサミコ酢(ブドウから作った酢)を効かせたラビゴットソースで、たっぶりのルッコラ(ゴマの味がするイタリアの葉もの)とともに。バルサミコ酢のコクと香りが食欲をそそる!

●肩ロース肉の煮込み・カレー風味 (写真中)

大きめの塊もホロリと軟らかく、カレーの風味が鹿肉の臭い消しにも。煮込んだキャベツの甘みが鹿肉にマッチする!

●ロース肉のステーキ・カシスソース (写真下)

赤身肉はミディアム・レアで。ソースは仔牛、鹿の筋(すじ)肉からとったフォン(だし)がベース。カシスの甘酸っぱさは鹿肉と相性が良く、深紅のソースが美しい。粒ごと肉にのった赤胡椒の香ばしさもソースの味を引き立てる!



当日使用したのは、大金畜産から仕入れた雌鹿の肉です。ジビエ料理に強い関心を寄せるメンバーと店スタッフで情報交換話に花が咲きました。特別にメニューを設定してくださった風間正彦シェフ、ありがとうございました。(阿部貴美子・写真は宮津直倫さん提供)

Venison Gourmet

シカと聞こう！シェフの話

第2話 塚本 孝シェフ@カプリ・カプリ

聞き書き：阿部貴美子（グルメライター）

▼足寄産鹿肉に惚れ込んで

10年ほど前、食肉を卸してもらっている上西商事さんから「足寄町に鹿肉解体施設ができるので、扱ってみませんか」と勧められました。それ以前の東京での営業時代、輸入の冷凍鹿肉に出会い、「おいしい」とは感じましたが、当時はなじみの少ない食材でした。

足寄産鹿肉を初めて食べた印象は「期待通り」。私自身は鹿肉の味わいの最大の魅力を「ネットリとまつわりつくような食感」と思っていて、それはしっかり感じられました。足寄産は冷凍肉を通年で入手できますが、ジビエのイメージを大切にするために当店では11月～2月のみの提供です。メニューには「足寄産鹿肉」と明記しています。

お客様に提供する際は、「鹿肉＝臭い」というイメージを持たせないようにもっとも気遣います。

ロース肉はステーキで、あまり焼きすぎないように。一人分の塊肉をカツオのたたきのようにミディアムレアで焼き、薄切りにして皿に盛り付けるタリアータは、余熱が通りすぎない調理法です。当店では青カビタイプのゴルゴンゾーラチーズと甘酸っぱいドライフルーツの2色ソースと合わせます（2000円）。

カルパッチョはロース肉でももも肉でも。ほかの店で食べておいしかったのは、黒胡椒を効かせたニンニク醤油とオリーブ油ドレッシングのカルパッチョ。ニンニク醤油は鹿肉の旨みを倍増させるようです。

肩肉は煮込みますが、臭み消しに一層、留意します。鹿肉に合う香辛料はシナモン、ナツメグ、ジェニパーベリー、胡椒など。赤ワインとハーブ、香辛料にひと晩漬け込み、肉の表面を焼いてから煮込みます。いずれはソーセージなども作ってみたいですね。

→足寄産エゾ鹿肉とリンゴのラグー（ミートソース）の手打ちパッパルデッレ。11月～1月中旬。1600円。シナモンとパルミジャーノチーズでコクと甘みを。

▼流通に「安全」「安心」「信頼」求めて

昨年は狂牛病騒動で鹿肉に人気が集まり、肉の確保が難しかった。新規店はなかなか入手できなかったのではないのでしょうか。

流通では“安全”を重視します。確かに、地元の猟師さんが撃った肉にも上質のものがありますが、臭いが出すぎるものは現状では日本人には難しいのでは。幸いにも信頼できる業者さんから安定した状態の肉を仕入れたことで、継続してこられました。以前、札幌市内で保健所を通さないルートでの鹿肉による病気が発生したときは、そのダメージから復活するのにとても苦労しました。流通上の希望を申し上げるとすれば、●骨も入手したい、●雄雌の指定をしたい、●もう少し安く、でしょうか。

当店の客層は幅広く、特にジビエファンが多くありません。鹿肉についてもひと冬に一度食べる、という状況です。リピーターになっていただくよう、こまめにソースや調理法を変えるように工夫しています。

■NOTE

ワインと地中海料理 カプリ・カプリ

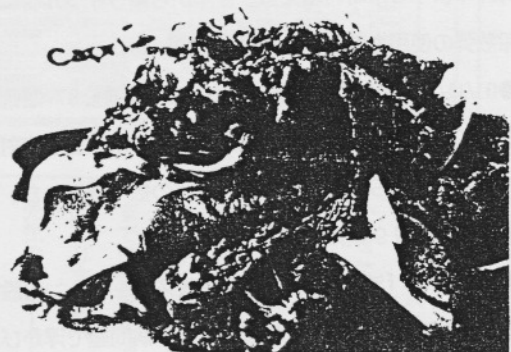
札幌市白石区栄通 19-3-1

電話011-851-1717

【営】11:30～14:00/17:30～21:00（ラストオーダー）

【休】月曜、第3火曜【席数】20席

【価格】ランチ1000円～、ディナー2500円～



YezodeerNewsClip

：メディアがとらえたエゾシカたち

◆月刊『専門料理』にベニスン登場！

プロ料理人の専門誌『専門料理』（柴田書店/1470円）2001年11月号にシカ料理指南が掲載されました。連載「西洋料理技術講座・肉を調理する」の第11回で、「銀座レカン」の十時シェフの技術指導により鹿の品種から部位、基本の料理法までフルカラー8ページにわたる特集。当協会が取材協力していますが、名称表記の「協力：（社）えぞ鹿協会」とはご愛嬌。肝心のレシピは7種類で、「首肉ミンチのパイ生地包み焼き」、「骨付きロースのソテー」、「マリネした鞍下肉のブドウの葉蒸し焼き」、「マリネした肩肉塊のロワール風煮込み」、「フィレ肉のイモと栗のピュレ包み焼き」、「マリネした内モモ肉のグリル焼き」、「マリネした詰め物外モモ肉のロースト」。ピケやマリネの基本、部位ごとに異なる加熱法など、ベニスン・グルメ初心者にも最適のガイドです。

◆道内新聞記事から<01年9月~02年1月>

- 01/09/01 「石狩市農協シカ駆除期間10月下旬まで延長」<道新・石狩版>6月頃から畑や水田に出没するようになり被害出始め、秋の収穫期を心配した石狩市農協がシカ駆除の延期を石狩支庁に申請。
- 01/09/14 「北広島市南の里や富ヶ丘にシカ出現、畑踏み荒らす」<道新・石狩版>道から駆除許可は得たが、南の里や富ヶ丘は線路や民家に近いため猟銃の使用は出来ない。シカはこのことを知ってか人を見ても逃げない。
- 01/09/27 「洞爺湖中島から運んだシカを他人の土地で無断飼育」<道新・石狩版>問題の業者は石狩支庁から飼育施設の許可を受けたが、地権者から許可は取っていなかった。石狩市も問題視。
- 01/11/01 「140市町村でシカ猟解禁、鉛弾は全面的に使用禁止」<道新・石狩版>岩見沢市や三石町などが加わったため昨年より3市町村増える。今年から鉛ライフル弾に加えて鉛散弾の使用も禁止となる。
- 01/11/13 「士別市でライトセンサス実施、87頭確認できた」<道北日報>士別市と地元猟友会が市内全域を対象に車のライトを照らし反射したシカの目の数で調査した。確認頭数は昨年より9頭減少。
- 01/11/14 「浦幌町、シカ残滓回収ステーションの設置見送る」<十勝毎日>見送りの原因は狂牛病問題で浮かび上がった肉骨粉の処理が急務となったため。

●01/11/17 「シカと列車の衝突事故多発、年600件超える」<道新・石狩版>道東方面の路線が全体の3分の2を占めるが、全道的な広がりが近年は目立つ。ネットを張るなどの対策も実効なく、抜本的な対策求められる。

●01/11/30 「シカ防護柵必要以上に補強、会計検査院が指摘」<道新・石狩版>コーナー柱を補強する控え柱約5000本は不要。金額にして約6000万円割高になったと会計検査院が農水省を通じて道に指導した。

●01/12/01 「洞爺湖中島のシカ250頭を50頭まで間引きすること決定」<道新・石狩版>洞爺湖エゾシカ対策協議会は今後の間引き策として捕殺を検討。生け捕りにしたシカはストレスなどからほとんどが死亡する事態を踏まえた検討策。

●01/12/07 「エゾシカ保護管理計画の素案、道が道民の意見を募集開始」<道新・石狩版>素案にはこれまで対象外だった地域を含めて目標頭数の設定や狩猟規制の緩和などが盛り込まれている。

●01/12/25 「厚岸で鉛中毒死のオオワシ見つかる、シカ猟で鉛弾使用か？」<道新・石狩版>解剖の結果、血中鉛濃度が通常の15倍と分かった。消化の経過から11月の猟解禁以降に放置されたエゾシカを食べたのが死因と考えられる。

●01/12/31 「釧路の高谷さん、シカ保護して27年間で60頭助ける」<道新・石狩版>エゾシカ保護センターを設立した釧路市駒場の農林業高谷さんは交通事故などで傷ついたシカを保護して野に返す活動を続けている。

●02/01/09 「シカの死骸放置禁止、鳥獣保護法来年春に改正予定」<道新・石狩版>中央環境審議会野生部会は鉛弾が体内に残るエゾシカなどの野生動物の死骸の放置を禁止する鳥獣保護法の改正を答申した。道内の取り締まり体制が課題。

●02/01/11 「池田町のシカ駆除頭数大幅減、シカ防護柵が移動ルート遮断か」<十勝毎日>駆除された頭数が大幅に減少した原因は、同町と隣接する浦幌町に整備されたシカ防護柵がシカの移動ルートを遮断したためではないかと考えられている。

◆番外編：兵庫県で「万里の長城シカ柵戦」奏効

2002/01/21 付神戸新聞に兵庫県のシカ被害と対策の現状に関する記事が出ました。B（被害対策）部会の若菜千穂さんから興味深い内容との指摘がありましたので、エゾシカネタではありませんが、参考まで全文掲載します。

「シカの食害防止に集落を金網でぐるり、県が新事業」シカが農作物を食べ荒らす被害の拡大を受け、兵庫県は二〇〇二年度から、被害集落ごとに、金網や電気さくでぐるりと

取り囲む事業に乗り出す。名づけて「万里の長城シカ柵（さく）作戦」（仮称）。シカ被害の背景には森林の生態系の崩壊があり、県は同時に氷上郡青垣町に中核研究機関の設置を検討。中長期的な取り組みとして、人と野生動物の共存を目指し、生息地管理などを調査研究する。県環境政策課によると、シカによる農林業被害額は県全体で年間五億円前後と、北海道に次ぐ規模。生産物だけでなく、農家の営農意欲への精神的な打撃も大きくなっている。このため県は、被害が大きい胆馬、西播磨、丹波、淡路地域を対象に、市町や地元と共同で対策計画をつくり、集落を取り囲む金網など、防護さくを効果的なエリアに順次設置する。県によると、三年前から実施している篠山市小多田地区では、高さ一・八メートルの金網で四十四ヘクタールを囲み、被害はほぼゼロに

なった。氷上郡氷上町でも約十年前から取り組んでいる。

一方、現在生息する約三万三千頭を〇四年度に一万五千頭程度に抑えるため、県は現行目標を一・五倍に増やし、三年間で年一万二千頭ずつを捕獲。また過剰な捕獲を防ぐため、ふんなどを調べる地点を大幅に増やし、正確な頭数把握に努める。氷上郡青垣町の山林百二十六ヘクタールに設置を検討する中核研究機関は、野生動物が人間に被害を与える原因解明など、共存への課題解決を目指す。生息地管理などを調査研究する「ワイルドライフ・マネジメント」の推進などが狙い。県立人と自然の博物館（三田市）など研究機関と連携。生息地や個体数、被害管理などの調査研究、専門知識を持った人材育成、農家への情報提供などを行う。県は〇二年度中に検討を終え、三、四年後の開設を目指す。■

事務局から

❶ 「野生生物と交通」研究発表会、2月18日に開催

日時：2002年2月18日（月）10:00～／会場：札幌市教育文化会館／主催：（社）北海道開発技術センター 共催：（社）エゾシカ協会、（財）北海道環境財団

前号でもお知らせした研究発表会開催が近づきました。スケジュールのご確認を。

問い合わせ先は（社）北海道開発技術センター内「野生生物と交通」研究発表会係（担当 新森）

〒060-0051 札幌市中央区南1条東2丁目11番地 電話：011-271-3028 FAX：011-271-5115

聴講申し込みは、<http://www.decnat.or.jp> でも受け付けています。

！こちら yezodeer.com / HP近況報告

2001-02年シカ猟シーズンに前後して、新たに規制対象となるショットガン用サボット弾の無害弾に関する試射レポート、アメリカやカナダで発見例の相次いだシカ慢性疲労病（CWD）に関するレポートなどをいち早く掲載することができ、各方面からご高評いただいています。

みなさまにいつそうご活用いただけるよう、今後も工夫を凝らしていきたいと考えています。ぜひご意見・ご批判やアイデアをお寄せ下さい。

★ <http://www.yezodeer.com/>



編集後記

今号はズバリ獵期ということで、フィールドの話題の充実を目標にしましたが、平田さんの健筆にも助けられ、おかげさまで情報豊かな紙面になりました。籠田先生のレポート、宇野さんのエッセイも貴重な内容とシカ歴の短い編集子にも感じ入るところがあります。つつい食卓に執着しがちなわが脳細胞。もっと大地に思いをはせたいものですが。。。(α)

編集スタッフ

木村篤子
阿部貴美子
木村克則
井田むつみ
小山裕代